



神道フォーラム

ISSA : International Shinto Studies Association

Vol.50

神道国際学会会報
平成27年2月1日号

特定非営利活動法人 神道国際学会 〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F 電話：03-6805-7729 <http://www.shinto.org>

神道フォーラム50号記念特集①

特別寄稿

神道研究の国際性の 進展に向けて

神道国際学会会長 栗本慎一郎

神道国際学会は言うまでもなく、神道研究の国際的発展に向けて活動している。あるいはそれを強く望んで活動してきた。毎年国際セミナーを開催し、その報告書とニュースレターを刊行するとともにそこに本学会理事を含む外国人研究者に参加をお願いして活動してきた。こうした活動の大規模化あるいは多頻度化はここでいう「発展」あるいは「進展」ということにあたるだろうことは間違いない。けれどもこの発展とは神道研究の発展の前に、本学会の物

的發展ということを含むものだし決して莫大ではない原資をそこに振り向けるようにするには難しい現実的問題がある。発足から20年を超す本学会が活発化して発展することは会長として大いに望むものではあるが、日本国内外の神道研究の大勢（というものがあろう）に對してなにか正しいものを提示・主張しているというのなら本学会の発展イコール神道研究の国際性の発展と言えることになる。しかし、決して単純明快にそういうものではないだろう。



本学会は国内外の神道研究に對して何か方法論あるいは学説に對して対立的独立的主張を持つものではない。そもそも、もともとそういった性格の集団として発足させられたものでもない。つまり各小王国が連合してヤマト政権を

作り大和と名付け、その上にスメラミコトをいただいた天皇制における統治体制のようなものである。このヤマトおよびスメラミコト論は経済人類学者としての私が主張する説であって、決して日本古代史学の定説ではないことは言うまでもないことだが、そもそもそうした学者が仮にも会長を引き受けていること自体が示すことはこの学会がある学説の主張母体ではないことなのである。

それでは本学会が神道研究の国際性の発展に向けて何ができるのだろうか。あるいは何をなすべきなのだろうか。このことを考えるうえで重要なのは、神道自体や本学会自体のことではなくてこの20年ほどの神道研究全体の国際性という問題である。明らかに言えるこ

神道を巡る問題の重要要素は 日本独自のものだけではない

が、そういう人々も神道を日本文化の中の一つの主要要因としてしかとらえてこなかった。このことにはもちろん、20世紀半ばに猛威を振るった唯物史観による歴史家や評論家が神道を一方的に無視したという罪が大きく響いているが、それがなくなつたはずの今でも神道は社会的右派のものという根拠

とは日本国外の研究者のためまぬ研究にもかかわらず諸般の研究分野で神道が大きな国際的関心の的になつてはこなかった、あるいはその兆しさえもわずかなものだったということだ。その国際性とは神道を巡る問題の重要要素が日本独自のものだけではないことが示されれば容易に展開されるはずだと私は愚考する。だから、そうなるにつれこなかったことは本学会を含み、日本の神道研究が全世界の学会および知識人に対し、神道の思想や実践が当然含むところの国際的問題、それはつまり展開される場所がどこであれ人間の本質に共通のかつ普遍的な問題が提起されるべきことが活発に論議されてこなかったということだろう。また一方で、日本文化や日本歴史に特別の関心を持つ人も多いはずだ

のない「気分」が完全に抜けてしまつているとは言えない。だが、どのように考えても上古の人でさえ祠や神社を作り、あるいは埋葬場を設置して死を弔う祭祀を執り行つたのは確かだし、それが（私の説に基づけば）地方小王国ごとに大きく違つたりあるいはできたばかりの統合的連合政権たる朝廷

によって修正されたりしていったことは確かである。そしてそれがたとえば朝廷の政治権力の後退によってまた新たな地方的（土着的と言ってもよい）祭祀の執行や死生観の展開あるいは浸透につながっていったはずなのである。これらが実際のところ、これまで個別単独にだけ研究されてきた。この研究も柳田國男、折口信夫の活躍にリードされたものであって、神道学専門の研究者によって行われたものはわずかである。そして柳田、折口の死後、彼らの思想や研究は神道学のなかではなくそれぞれ柳田学や折口学ということを取り込まれていった。よってその普遍的意味が十分追求されてこなかったのは大きな問題だと言える。

たとえば、近年、政治的な問題を作り出しているところの靖国神社に戦没兵士を祀ることがある。柳田は、神社に人を神として祀る習慣はいつ生まれ、いつ発展したかを考察している。彼が関心を持ったのは、実はそれが神道に普遍で固有の習慣ではなかったからなのだ。またほかの研究では、聖徳太子や菅原道真と言った現生存命中に必ずしも広範な尊敬や尊重を受けなかった人物が神としてむしろ広範に祀られていることを示しているが、これは神社に神として現実の人を祀ることが

日本古代国家および日本古代王権の成立と神道の深いかかわり

単純なことではないことを示している。私は靖国神社問題を単純な政治問題として取り上げるのではなく、一つの問題にこだわらざるもりのないが、近年の研究で聖徳太子という個人は存在せず、聖徳太子を象徴とするような一族あるいは集団がいた「だけ」だということならばたいへん深い問題にもなるだろう。これはもちろん、日本古代史において解くべき重大なことである。第二次大戦直後以降、いわば暗い論争の闇にある日本古代史の学者はこのあたりについてかたくなな定説を守るこのみというより、疑問に答えないというより問題を認めないというような超「古代的」態度をとっているのみだ。これは人を神として祀るか祀らないかという問題を超えて、日本古代国家および日本古代王権の成立と神道の深いかかわりの問題となる。非常に難しい。

死生観の問題だけではない。日本文化における正義とは何かも、（ある共同体にとって）内部と外部を分ける具体的物や観念は何かということも大きな問題である。正義という問題は当然として道徳

とは何かの問題に導くものであり、これについてドイツの法哲学者グリュムが収集したような示唆的な民話あるいは説話や伝承が各地の神社周辺で本来採集整理されるべきであろう。これは子供たちに人気のある日本民話という分野でなく、日本における宗教的道徳観の問題なのでもある。内部と外部の問題はまたそこに「境界」や「周縁」という文化人類学的哲学的問題を生み出し、言うまでもなく聖なる空間の本質に迫るものとなる。だがそうは論じられてこなかった。

これらだけではないが、たとえばこれらについては十分な研究はされず、たとえ書物の題がこうしたものであっても、その内容はまさに「国際性が足りない」ものだけに近かった。この足りなさは、分析すれば、国際的な？（と言えれば）法哲学や道徳哲学のほうの視野の狭さのせいだと言えれば言えるが、日本の側からの「宣伝不足」あるいは「理解不足」ということがあるだろう。いわば「発信不足」なのであるが、発信するものがないということでは絶対になからう。ここにおいて「事実」を作り出す必要は全くない。何を

発信させるべきか、理解すればいいだけのことである。吉本隆明氏はヘーゲル論にぶつける形で禁忌論や共同幻想論をつづったではないか。これはつづめてしまえば、永遠の課題でもある研究の質や視野の問題なのである。

日本文化の基幹の重要なもの一つ神道が国際的に大きな関心にさらされていると言えないことは実は、日本にとっての外国からの日本研究のほうにも大きな問題がある。日本人の死生観や正義の在り方、宗教生活の在り方についての研究が深くないものだからであるし、そこがもともと弱い日本人の研究者のレベルにそのまま乗っかってしまっているからということもあるのだ。かつて、日本人研究者

共同体の内部と外部を分ける物や観念。聖なる空間の本質に迫る

道についてもその位置づけについては多く見方の矯正がなされるべきものと考えているがこれまでの日本学や神道学（という言葉をあえて使わせていただく）にそうした動きは全くない。簡単に言えば、江戸時代中期以降日本の農村には世界においても際立つ性格と規模の変容が訪れたことがはっきりしているのに、農村に鎮守の杜を持

による江戸時代農村の研究がすべて農民および農村の生活の悲惨さばかりを強調していた時、当時留学生だった後のT.C.スミス（カリフォルニア大学バークレー校）教授は自ら原資料を検討分析してその主流の説の嘘を明らかにして『近代日本の農村的起源』を著わしたものだ。明治維新以降の日本経済の猛烈な発展の基礎を説明するこの説は今や完全に定説と言えるものになっているが、誤りを認めさせられたはずの唯物史観の側からまともな反省の言葉はなく、ただなし崩しにスミス教授の研究を黙って認めているだけである。しかし、何はともあれ、近代日本の経済的基盤についての見方については一つの矯正が行われた。私は、権力によって公認された神

つ神社およびその道たる神道に際立った変化が起きなかったということは考えられるわけもないのである。

もちろん、いくつもの文章化された神道論や、初めてと言ってよい教義を論ずることおよび意識的な教派が生まれた。しかし、そのどれもが大和朝廷が生まれた時代

の「公認された」神道を受け継ぐものとされている。神道は、しかし、天武天皇が現在の天皇家を盟主とした天皇制の基礎を築いた時、すなわち伊勢神宮をトップとした神道の現実におけるヒエラルキーを確立させて行った重要な時期に、ついで変化の時代を迎えたはずである。この第一の変化も日本社会にとつて重要きわまるものであったが、第二の変化である江戸時代中期以降の変化も重要きわまるものであった。第一の場合は日本に天皇制というユニークな古代王権を確立させたものだったし、またすでにそれまでに日本社会にしっかりと根を張った神道を表面上かもしれぬが大きく変容させたものだった。第二の場合は日本にアジアでは無類の豊かな資本を持つ近代社会を用意させたのだった。

天皇制の成立と神道（の変化である、実のところは）については不十分であつてもまだしも一応の議論がされている。しかし、日本の近代の成立と神道の性格（の変化）については議論や研究の端緒さえもなかつたかに見える。日本近代の成立と神道の発展（または変容）というのは極めて魅力的なかつ国際的な学問的テーマである。

日本近代の成立と神道の性格の研究を通じて国際的学問分野に貢献を

それを研究し論じることがまきしく国際性豊かな学術的パフォーマンスであるに違いない。また本当のことを言えば、天皇制の成立と神道との関係あるいは神社との関係は詳しく見れば王権というものに関する世界の学問にことに新しい分析のツールをもたらずはすである。実は王権論のみならず哲学および政治学の国家論もまた、いわば行きづまりを見せている。ヨーロッパではなかつたところの連合制を基とし、かつ領土内での棲み分けを許す、いわば複層的な王権について検討し、宗教的価値観とのクロスオーバーを考察することは大変に国際的であるはずのことである。

もちろん、国際的であることが神道学の最終の目的というわけではない。だが神道学は上に述べた意味で十分以上にこれまで確立されている国際的学問分野に貢献できるものであり、またそうすべきものなのである。神道国際学会はこれらすべてを解決改善することに特段に力を持つわけでもない。しかし、そこに向けて少しでも力を発揮できるように試みてみたいと思うものである。

奉祝記念大祭と秩父夜祭を斎行——秩父神社

「御鎮座二〇〇年」を祝し
新神前舞「柞乃舞」も奉舞

本会の藺田稔・前会長が宮司を務める秩父神社（埼玉県秩父市）で昨年十二月一日から六日間、平成二十六年例大祭が行われた。今回は崇神天皇十一年の御鎮座から二千年という佳年に当たるため、奉祝記念大祭として斎行され、記念行事も続いた。

本殿で執行された本儀（三日）では、下賜の御幣帛を奉る栄誉に浴したほか、記念事業として新たに制作された巫女舞「柞乃舞」（東儀季一郎作曲・作舞）の奉舞も初披露された。四人の乙女が寒椿を手に本殿前の舞台に進み、雅に包まれながらも凛とした所作で舞い納め、参列者から大きな拍手を浴びた。



記念大祭の本儀で新作「柞乃舞」を新装束で舞う乙女たち

この「柞乃舞」では巫女装束も新調された。

は参集殿で直会があり、挨拶に立った藺田宮司は、同神社創建の由緒を踏まえ、「当世流の考え方だけでなく、人の心が伝えてきたものも極めて大事。その気持ちを現代に伝えていきたい」と話した。各界の来賓からは祝辞があり、宗教界では臨済宗妙心派の又玄窟河野太通管長、三峰神社の中山高嶺宮司、立正佼成会の庭野日鑽会長、靖国神社の徳川康久宮司らが挨拶した。

二、三両日には例大祭の付け祭である秩父夜祭（日本三大曳山祭・重要無形民俗文化財）もあり、六台の笠鉦・屋台が深夜まで市街を曳き回され、多くの観光客を熱気で包んだ。特に三日夜には、お旅所への巡行があり、大榎・御輿・大幣を伴う神社の行列に続いて、町内側の笠鉦・屋台が威勢よく市街地を進んだ。お旅所に到着すると、御斎場祭が厳かに執行された。

また四日には、お旅所の前の広場で、七百年ぶりという流鏝馬神事も奉納された。天地を清める鏝矢が射られ、巫女が馬上で馬場清めの扇舞を舞い、板東武者による騎馬術が披露されると、いよいよ流鏝馬となり、疾走する馬の上から射られた矢的を射ぬくたびに、詰めかけた観衆から歓声が上がった。

（T・S記す）

本儀の後に
の芳志があつた。

神道国際セミナーを開催 東京の聖アンデレ教会で 「キリスト教と神道との対話」

本会主催の国際神道セミナー「キリスト教と神道との対話／二つの宗教が探る協調への道筋―過去・現在から未来へ向けて―」が二〇一四年十一月二十二日、東京・芝公園の聖アンデレ教会で開催された。接点が希薄とされる両信仰の対話に向けた糸口として「環境問題」と「祈りの意味」の二点を取り上げ、対話した。冒頭の「問題提起」では、本会のマイケル・パイ理事（マールブルク大学名誉教授）が「なぜ今、対話が求められるのか」、ジョン・グリーン副会長（国際日本文化研究センター教授）が「これまでの歴史を振り返って」と題して話した。続く「対話その1「環境問題と宗教」

では、グリーン副会長を司会に、パネリストの櫻井崇氏（茨城県・五所駒瀧神社宮司）と岩城聡氏（日本聖公会・川口基督教教会司祭）が対論し、三宅善信理事長（金光教泉尾教会総長）がコメントした。【対話その2「宗教における『祈り』の意味】では、パイ理事を司会に、パネリストの矢島嗣久氏（東京・北澤八幡神社宮司）とフランコ・ソットコルノラ氏（カトリック霊性交渉センター神父）が対論。コメントーターはムケンゲシャイ・マタタ理事（オリエンズ宗教研究所所長）が務めた。総合司会は岩澤知子常任理事。

会場となった聖アンデレ教会は日本聖公会に所属するキリスト教会。十八回を数える国際神道セミナーだが、本格的なキリスト教会での開催は初めて。宗教者や学者、一般人など約一五〇人が参加し、パネリストらの話に熱心に耳を傾けた。



会場となった聖アンデレ教会礼拝堂

「宗教の良好な並存には知ることが必要」（パイ氏）
「バチカンから神道への年頭挨拶に新時代の予感」（グリーン氏）

【問題提起】

【対話】に先立ち、導入としてパイ理事とグリーン副会長が交流への視点を提起した。

パイ理事はまず、今も続く中東の宗教対立を念頭に、「宗教の並存、つまり、互いに尊敬しながら共に存在することが大事だ。より良い並存を求めるなら互いに知り合うことが必要になる」と話し、宗教対話が求められる根拠を明示した。

そして、民族的伝統に基づく神道と、当初から民族を越えた普遍性を求めたキリスト教とは異なる性質があるが、「課題の多い現代では」それでも対話と交

流は必須だ」と力説。対話のための話題については、双方の価値と伝承、概念が打ち出し得る「環境問題」への取り組みを披露し合うこと、双方を知るためのポジティブな話題として「祈り」に込められた心に関心を寄せることを提唱した。

一方、グリーン副会長は、神道とキリスト教が接触した歴史を振り返り、現代社会における交流の現状にも触れた。冒頭、昨年正月にバチカンの枢機卿から神道へ、世界平和に向けた協力を呼びかける年頭挨拶があったことを紹介し、「新しい時代への開幕になればと思う」と感慨を表した。続く交流史の回顧では、まず江戸初期に成立した神仏批判書『妙貞問答』を取り上げ、その中で二人の尼僧が、神道も価値がないとの結論を導き、嘲りを表しているとした。

また、明治期にロシア正教会の大主教が神理教の教主、佐野経彦と問答した折には、国教化された神社と記紀神話を「片っ端から突っぱねた」と紹介。その後も、教団として双方が対話に臨んだ形跡はほとんどないとした。

さらに、現代の国際会議でも、キリスト教の神道に対する警戒感が残るとし、「影を落とす」といっているのは、やはり「靖国問題」。国家が責任を負っていないと感じるため、神道と国家が密着するのは、平和と正義への努力を踏みにじる行為だと攻撃している」と説明した。そのうえで、「バチカンから神道への『年頭挨拶』には、交流への積極的な姿勢が垣間見える。対話の可能性はある」と結んだ。

「思いやりや感謝を育む―森や自然は最高の教師」（櫻井氏）
「被造物の一体性を強調する解釈転換の流れ」（岩城氏）

【対話その1「環境問題と宗教」】

続いて「環境問題と宗教」をテーマに櫻井氏と岩城氏がそれぞれ、神道とキリスト教の立場から自然環境問題への取り組みについて話した。

櫻井氏は、奉職する神社が鎮



グリーン副会長の講演に聞き入る聴衆

座する地域に産業廃棄場が建設されたのを契機に環境問題に強く関心を抱くようになったと語り、「結局は、自然から学ぶことの感動や、自然や人に対する思いやりを忘れないことが肝心だ」と主張した。そして、自身が提唱している「千年の森づくり」構想に沿って実施している自然観察会や植林、田植え・収穫の体験学習などを紹介。「とくに鎮守の森は、神と一体化しているから、自然の恩恵をまざまざと感ずることができる。思いやりや感謝の念、礼節から社会規範まで育んでくれる。森や自然は最高の教師だ」と熱く語った。

他宗教との対話については、「他者を排除するのではなく、連帯し、共生する社会作りを努力していこう」と呼びかけた。

一方、岩城氏は、キリスト教の教義と環境問題の関係について考察を展開。「物質文明にはキリスト教が絡んでいる」とか『創造物のうち人間のみが他の被造物を支配せよ』と『パイブル』にも記されている「自然環境問題に関する意見はこれまで、キリスト教の立場は旗色が悪かった」と振り返った。そのうえで、「人間の超越性」の観点で批判を受けるとキリスト教側からの応答がないし反論の事例を取り上げ、哲学者や神学者の解釈や、キリスト教の自己検証などを列挙した。



マイケル・パイ理事

まず、「地を従わせよ」「すべて支配せよ」（創世記）との記述については、羊飼いのような指導者像を求めているとの考察があるとし、「もし尊大さに問題があるとするならば、ギリシア的尊大さにおける専制君主的な王権思想であり、ヘブライ的な世界には、それはない」と述べて、現在では反王権思想の見解が大勢だと指摘した。また、他の伝統的な霊性を踏まえ得る可能性も示したほか、キリスト教の国際会議においても被造物世界の「一体性」を確認していると、「自然との調和を目指す方、内在的なものに対する新しい神学の改革も現れてきている」と解説した。

両氏の話にコメントした三宅氏は、「神道には、恵みは自然に返すという考えがある。手つかずの自然だけでなく、人間との関わりの中にある自然という点にも踏み込んでいただいたと思う」と述べた。また、キリス



両信仰間で熱心な対話が交わされた

ト教に関しては、「峻別し管理するとか、ケアするとかという一段上の目線が残るなら、それが今後、（神学論争のなかで）どうなっていくのか、注目したい」と語った。

「祈るだけでなく実践につなげることが大事」（矢島氏）
「祈り——神の祈りと愛と喜びに預かるための道」（ソットコロノラ氏）

【対話その2】宗教における「祈り」の意味

引き続き「宗教における『祈り』の意味」をテーマに、矢島氏とソットコロノラ氏がそれぞれの信仰が捉える「祈り」の本質を説いた。

矢島氏は初めに、他宗教との「対話」に関して、自身の宗教協力や社会活動の経験を披露。自社の北澤八幡宮を会場として提供した一昨年の「世界平和を祈る集い」（イスラム教・キリスト教・神道・仏教）を紹介した。また、神社関係団体で海外の自然災害へ支援を行ったこと、イスラエルを訪問しユダヤ教ラビと交流を図ったことなどを挙げて、宗教者による対話と社会的実践の重要性を力説した。現在も、カトリックのシスターからの要請で、カメルーンの学生への奨学金援助を継続するなど、底辺での民間交流を大切にする考えをにじませた。

神道の「祈り」については、「い

のり」の「い」は齋（いみ）。忌（いみ）で、悪を除き、福を求めめる気持ちであり、「のり」は祝詞の「のり」で、神意に通じた神の定めた掟だとした。また、多岐にわたる神社での祈願や人生儀礼の中に「人々の求める、切なる願いが込められている」と話し、その豊かな文化性にも言及した。そして「ただ単に祈っているだけではなく、実践につながるものが大事だと考えている」と付け加えた。

一方のソットコロノラ氏は、「罪を犯しても、『なぜ犯したのか』と、神様は話してください。神様と人間の間の歴史、それが『聖書』なのです」と切り出し、「祈り」とは神と人間との出会い、話し合いであり、それが人間を愛することにもつながるとした。また、実際の祈りの在り

環境問題「祈りの意味」——協調に向けて「対話」を展開

深かったのは、両氏とも言葉や願いだけでなく、行動や実践を内包すると話されたことだ」と述べた。また第二点として、祈りの「景色」という側面に触れ、祈りの「場」が、実践や体験につながる「場」にもなると発言した。

このほか、【対話】の中でソットコロノラ氏は「神道で祝詞を奏上するあの形と動作は、まさ

ようにも話を進め、イエスが朝から晩まで父である神と話したように、親しく話し、祈ること、また心の中の観想の祈りでは神を仰ぎみて、創り主である現実すること、さらに「ミサ」を捧げること——などが留意される」と説いた。

そして「祈りの目的は、神様の道具として神様と一体になることです。私たちは祈りに預かっていただいて、祈る。祈りとは結局、神様の祈りと愛と喜びに預かるための道なのです」と語った。

両氏の話を受けてコメントしたマタタ理事は、二つの観点からまとめを行い、「第一点は『祈りとは何か』。それは究極的な存在を求めて祈るということであり、その存在との内面的な交わりだということになる。印象

に神様に祈るにふさわしい態度だ」と話し、同時に「キリスト教の『愛を以て祈る』ということについて神道ではどう見るか」と質問を投げかけた。これに対して矢島氏は、「神様については、親しみよりは、やはり畏れ多いものと捉えることが普通だ」と応答。祈りや神概念の捉え方においても、両教の本質的な違いを垣間見せた。



会場からの多様な質問に答える講師たち

【質疑応答】

後半では、会場の参加者も加わって【質疑応答】が行われ、活発な対論の場となった。

まず、神が人に対して、他の被造物を「支配せよ」と命ずる「聖書」の言葉には深い関心が寄せられた。これに対して岩城氏は、「土地の管理にせよ、もともとは『征服せよ』との意味合いが強いことは否めない。しかし今は、同伴者たる動物と連帯する、先住民とも連帯するなどと捉えることが多くなっている」と、改めて強調した。パイ理事も「神学の新たな動きとして、人間の超越ではなく、自然も含めすべては神に属している」と考えることが一般的になってきている」と捕捉した。

民族宗教とされる神道の理念については、会場から「長い歴史を持つ時間的な点から見れば

普遍性がある。今以上に世界に向けてその有益性を主張してもいいのではないか」との意見も出された。

中東でテロ活動を活性化させ、国際問題となっている「イスラム国」の動きについても質問があり、「他宗教が傍観していることは『イスラム国』の組織を容認することにならないか」との指摘が投げかけられた。

これに対して岩城氏は「たんに原理主義やイスラムは悪だと思えるだけでなく、互いを理解する努力も必要だ」、ソットコロノラ氏は「平和なイスラム他派もある。人間は信仰と理性を持つべきで、対話の中で原理主義の人々に影響を与えたいものだ」とそれぞれ述べ、テロへの批判は当然としながらも、平和的な解決を模索する努力を求めた。矢島氏と櫻井氏も、暴力的な権威の弊害に触れ、「理性は忘れてはいけない」（櫻井氏）と呼びかけた。

閉会にあたり挨拶した三宅理事は、「現代社会では、様々な宗教の人と一緒に生きていかねばならない。その時には、やはり対話がなければ物事は進まないと感じさせられた」と述べて、今セミナーの収穫を強調。併せて、本会は今後も、内外からの期待に沿えるよう尽力すると表明した。

（T・S記す）

神道フォーラム50号記念特集②

『神道フォーラム』50号を振り返って

椎名潤（岐阜女子大学客員教授・神道国際学会監事）

神道国際学会創立10周年を記念し、平成17年1月15日付けで発刊された広報紙『神道フォーラム』が50号を迎えた。そこで事務局から、『神道フォーラム』50号を振り返って、本学会のこれまでの歩みと実績の一端を紹介してほしいとの依頼があったので、まとめてみた。平成17年が創立10周年ということは、今年が「創立20周年」である。本来ならば、本学会の20年のまとめも必要になるところだが、著者に与えられた使命ではないので、あくまでの掲載された事象からのみ分析・論評を試みた。

本学会は創立以来10年間、神道の学術研究の推進と啓蒙活動やさまざまな事業を展開してきたが、創立10年を期して、創立以来の役員である中西旭会長（中央大学名誉教授・神社本庁教学顧問）、深見東州副会長（ワールドメイト代表）が役員を退き、新たに藺田稔会長（秩父神社宮司・京都大学名誉教授）、米山俊直副会長（大手前大学元学長）という新体制がスタートした年でもあった。中西会長、深見副会長時代が第1期

とすると、藺田会長、米山副会長体制は第2期といえよう。なお、梅田善美理事長は留任した。創刊号には「節目の10周年を迎え、関連団体の活動区分と関係を見直すとともに、役割分担を明確にすることで、それぞれの成果をあげていく」「NPO法人の神道国際学会は従来以上に学術面での活動に力を入れ、学術的かつ国際的な視点からの日本文化研究も含めた神道研究を推進していく」との活動方針が発表され、より学術的な志向をめぐらしていくことになったことが伺える。

『神道フォーラム』（隔月刊）年6回）はその新体制と新志向に基づいて誕生したものであった。藺田副会長は就任の弁で「学術的かつ学際的な研究活動と国際的な研究活動に重点を置く」と表明。関連団体の国連認可NGO・ISF（The International Shinto Foundation）本部・ニューヨーク）は国際的に神道や日本文化を紹介するなどの啓蒙活動を担うことになり、深見副会長はISFに専念することになった。



神道フォーラム創刊号

『神道フォーラム』は以来、東日本大震災が起こった平成23年まで、梅田理事長、梅田節子事務局長の獅子奮迅の働きにより、「隔月刊」を守り続けた。定期的に刊行物を発行することは大変な努力が必要で、原稿の依頼と催促、時には自らの取材もあり、締め切りを気にかけるが、その編集作業、そして発送というサイクルを7年間続けた。

この間、本学会は毎年、「神道セミナー」と「国際シンポジウム」を開催し、その詳細を『神道フォーラム』で紹介した。なかでも聖徳太子の遣隋使派遣に因む日中交流1400年を記念した国際シンポジウムを、平成19年5月に大阪の住吉大社で開催し、その模様は『神道フォーラム』（平成19年7月15日号）に詳報されている。また国連「スポーツと体育の国際年」にあたっては、平成17年7月に東京・神宮外苑の日本青年館で、国際

シンポジウム「体育としての武道の精神的・実用的価値」を開催し、この模様を同年9月15日号で紹介。国連「国際森林年」に因んでは、平成23年7月に熊野本宮大社前にある「世界遺産熊野本宮館」（和歌山県田辺市）で、国際シンポジウム「神仏の森林文化」を開催した（平成23年9月15日号）。

伊勢神宮に関しては、その研究の記念行事に連動して、さまざまな関連行事を企画・実行していったのも本学会の特徴である。このほか、平成23年の東日本大震災を受けて、本学会では同年5月15日号で「大震災特報」を組み、「被災された皆様に世界各地からのお見舞いの言葉をお伝えします」と題して、中

究が神道界の最大の関心事であることから、何度も紙面で取り上げており、平成25年10月には東京・政策研究大学院大学で「出雲と伊勢——古代王権と聖なる空間」を開催し、筆者の伊勢神宮「遷宮の儀」の取材記事とともに、平成26年2月1日号で紹介している。

また式年遷宮を前に、平成18年4月と5月の2回、社殿造営のための御用材を神領民が神宮に曳き入れる「お木曳」行事に本学会会員80人が参加し、同年7月15日号では「お木曳」特集号を組んだ。さらに平成25年8月2日、伊勢の旧神領民らが新宮の建つ御敷地に白石を敷き詰めていく「お白石持行事」にも参加・奉獻し、本学会からジョン・ブリン副会長、岩澤知子常任理事、梅田節子前事務局長らとともに会員120人が同行事に加わった。このように内外

創立以来、神道の学術研究推進と啓蒙活動を始める各種事業を展開

の記念行事に連動して、さまざまな関連行事を企画・実行していったのも本学会の特徴である。このほか、平成23年の東日本大震災を受けて、翌年の2月には、鎮魂と被災からの復興を願い、岩手県・大船渡で国際シンポジウム「災害と郷土芸能」を開催、3月15日号で詳報した。また新体制では、各専門領域の

国・浙江工商大学東アジア研究院、中国・南海大学日本研究院、神道国際学会ロシア事務所などからのメッセージを載せている。大震災に関連して、翌年の2月には、鎮魂と被災からの復興を願い、岩手県・大船渡で国際シンポジウム「災害と郷土芸能」を開催、3月15日号で詳報した。また新体制では、各専門領域の

最新研究成果を発表する「専攻研究論文発表会」も行った。同「発表会」は、「学術団体としての活動を一層充実していくため」（平成18年1月15日号）に、通常のシンポジウムやセミナーとは別に企画されたもので、本会の活動はより学術志向を強めていくことになった。

さらに特筆すべきは、『神道フォーラム』創刊号から連載されている「神道DNA」というコラムで、こちらも50回を迎えた。国際的に活躍する神道人の面目躍如といったところで、毎回、最新の国際情勢や神道文化を伝えてくれる。このコラムは改めて1冊にまとめてほしいと願っている。『神道フォーラム』ならではの情報としては、平成22年7月15日号に見られる「ロシアで初の神道事典が刊行」という記述である。同事典は同年5月、ロシアの日本研究者13人が日本の神、神社、儀式などの神道用語をロシア語で解説したもので、B5判・316ページからなる大冊である。

毎年、会員が楽しみにしていた企画ものでは、恒例の「新春対談」がある。最初の対談は平成18年1月15日号の「藺田稔（会長）vs山折哲雄（宗教学者で国際日本文化研究センター元所長・神道国際学会設立賛同者）」で、「今に問う 神仏の世界」をテーマに論じている。次は平

成20年1月15日号で、蘭田会長とJ.R.東海の葛西敬之(かさいよしのぶ)会長が登場。教育の再生、特に日本の地域共同体にあった伝統的な教育の必要性和日本文化について語り合った。平成21年は1月15日号では、蘭田会長と奈良県立万葉文化館の中西進館長が「日本人の心根に流れる気風・万葉の心を次世代に語り継ぐ」と題して対談。平成22年は1月15日号では、蘭田会長と国立歴史民俗博物館の小島美子名誉教授が獅子舞、神楽、囃子、盆踊りなどの民族文化にこそ、日本人の心根が見えるとの見解を示した。平成23年1月1日号では、蘭田会長が社叢学会の上田正昭理事長(京都大学名誉教授)と、鎮守の森をめぐる人権思想と生命倫理について論じ合った。最後は平成24年1月15日号で、蘭田会長が東京農業大学の進士五十八前学長と対談。「日本の庭園文化と神道」というテーマのもと、庭園や神社にこそ、社会づくりや生き方へのヒントがあるとの結論に達した。

また連載物は多種多様で、「話題のこの人」、「From Abroad」、「神道研究最前線」、「神道展示館訪問」など。その幾つかを紹介すると……

「話題のこの人」では、「浦安の舞」の感想文が教科書に載った中学1年生の土佐谷利穂さん、神戸の神社で阪神大震災に被災した神職で歌手の新渡戸涼恵さ

ら、フランスに分社を設立した三重県・水屋神社の久保憲一宮司、東京大学に「神社・神道研究会」を立ち上げた江端希之さん(東大大学院生)など、実に細かく話題を拾っている。

外国人研究者を紹介する「From Abroad」では、主な人物だけでも、ロシア出身のワシリー・モロジャコフ拓殖大学日本文化研究所主任研究

神道研究の一翼を担う存在として さらなる紙面の充実をめざす

ナコルチェフスキー・慶応大学文学部助教授、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院のルチア・ドルチェ助教授、中国・浙江工商大学日本文化研究所の李美子講師、ロシア出身の神戸市外国語大学のリュドミラ・エルマコーワ教授、中国・南開大学の劉岳兵助教授、イタリア国立カ・フォスカリ大学のマシモ・ラベリ教授、中国・北京大学の外国語学院の劉琳琳専任講師、インド・デリー大学のランジャンナ・ムコパディヤヤ准教授と、海外の日本文化、神道研究者の業績と素顔を紹介。

「神道研究最前線」では、古事記の研究で知られる鈴木鹿千代(すずかちよ)乃・神戸女子大学助教授、古代地域史研究の瀧音能之・駒沢大学教授、自然学と人間学の背景にあるものや日本的な霊性の研究者である鎌田東二・京都造形

員、イタリア・ベネチア大学のエリカ・バッツェツリ博士、中国・浙江大学日本文化研究所の王宝平副所長、イスラエル・テルアビブ大学東アジア学部のイリット・アヴェルブツフ准教授、ロシア科学アカデミー東洋研究所日本研究センターのモロジャコフ・エリデーナセンター長(モスクワ国際関係大学教授)、ウクライナ出身のアンドリイ・

芸術大学教授、平野孝國・新潟大学名誉教授(神社本庁教学顧問)など。「神道研究羅針盤」では、片山文彦・花園神社宮司、櫻井勝之進・元神社本庁総長、森田康之助・元國學院大學教授(神社本庁教学顧問)、民俗学者の吉野裕子さん、吉田敦彦・学習院大学名誉教授、桜井徳太郎・駒澤大学元学長、上杉千郷・学校法人皇學館理事長らを取り上げている(ここまでの肩書は当時のままにした)。

さらに「神道展示館訪問」では、國學院大學神道資料館に始まり、皇學館大學神道博物館、鶴岡八幡宮宝物館、熱田神宮宝物館、春日大社宝物館、神田神社・神田明神資料館、賀茂別雷神社高倉殿、鹽竈神社博物館、神宮徴古館、彌彦神社宝物殿、明治神宮宝物殿、松尾大社宝物館、湯島天満宮宝物殿、鹿

鳥神宮宝物館、出雲大社神祇殿箱根神社新宝物殿、三嶋大社宝物館、大國魂神社宝物殿、日枝神社宝物殿ほか全国の神社に併設された展示館を訪ね、貴重な宝物類を紹介している。

ところで平成22年11月29日に本会創立賛同者の一人として発足準備の幹事を引き受け、平成6年の設立後は理事長として、会の運営・実務にあたってきた梅田善美理事長が逝去された。平成23年3月15日号に掲載された蘭田会長の「故梅田善美理事長を痛惜して」という一文を紹介する(抜粋)。「をしへお

くその言の葉を見るたびに又問ふことのなきぞかなしき／平安末の勅撰集『千載和歌集』に載る藤原定公のこの歌が、梅田理事長の訃報に接した時、真っ先に脳裏をかすめた歌でした。(中略)顧みれば、平成6年の本学会設立以来、16年の長い間、文字通り生みの親ともいふべき献身的な働きをされ、抜群の交渉力を発揮されて、私どもが目指した神道文化の国際的研究交流を推進し、実現してくださった、その大いなる功績は今さら申し述べるまでもありません」。

梅田理事長の逝去は本学会運営にも大きな影響を与えたようである。平成24年末の任期満了で、梅田理事長ともども、本学会設立以来18年間にわたって諸活動に携わってきた蘭田会長が退任



新装丁になった第47号

会の再編成を期して、後進にその責を譲る旨が記されている。

これを受けて、平成25年1月から発足したのが現在の陣容で、会

した。平成24年11月15日号の蘭田会長退任の挨拶には「平成5年に成就した伊勢神宮の第61回式年遷宮を奉祝して開催された『千年森に集う』という国際シンポジウムなどで知遇を得た宗教団体ワールドメイト代表の深見東州氏の呼びかけにこたえ、当時の錚々たる学者・文化人の顔ぶれの末席に加わったのがきっかけで、平成17年から8年間、会長に任に就こうとは夢にも思いませんでした。それというのも、本学会の設立が深見東州氏の深い思い入れで、日本の神道文化が特に戦後の国内と海外で誤解と偏見に災いされて、本来の姿が学問的にも多角的にも研究されていらないことを憂慮されての純乎たる学会設立の呼びかけであることを見極めての参画でありましたし、また当初から理事長の大役に就かれた今は亡き梅田氏の国際感覚豊かかつ度量の大きい実行力を深く信頼しての活動参加であったからでした」とあり、これを機会に本学

術短期大学学長・元衆議院議員)、副会長にはジョン・ブリーン(国際日本文化研究センター教授)、理事長には三宅善信(金光教泉尾教会総長)の各氏が就任した。第3期目のスタートである。新体制での『神道フォーラム』発行は年2回刊となり、今日に至っている。しかし紙面を全面的に刷新し、本学会の英語表記も「International Shinto Studies Association」と改めた。

本学会では、これまでに開催したセミナーやシンポジウムの内容は、すべて小冊子にまとめているが、50号に及んだこの『神道フォーラム』も貴重な資料に他ならず、神道研究の一翼を担うものになったと固く信じる。インターネットの普及により、紙媒体という形での広報体制がどこまで続くかは、それぞれ、神のみぞ知るであるが、今後とも一層の紙面充実を期して、この一文を閉じたい。

『少子化は神道的価値観に反する』

金光教泉尾教会 総長／(株)レルネット代表
三宅善信

現在、われわれ日本人が直面する最大の課題とは何であろうか？ 景気回復、消費税、集団安保、震災復興、原発事故、国土強靱化…？ 確かにいずれも大事な問題には違いないが、景気なんてものは、何をしてもしなくてもどうせ何年か周期で上がったり下がったりしている訳だし、地震・津波・噴火・台風などの自然災害も、日本列島の上に暮らしているかぎり、神世の昔から繰り返されているものである。原発事故に限らず交通事故だって、人間社会にミスは付きものだ。問題は、文明の利器を用いることによって受けられるメリットと、何か重大な問題が発生した際のデメリットを天秤にかけて、われわれは科学技術文明のもたらす快適さ享受着てきただけのことである。

私の見るところ、最大にして最悪の課題は、少子高齢化による急激なる人口減少である。日露戦争直前の1900年には4,400万人だった日本の人口は、太平洋戦争後のベビーブームだった1950年には8,300万人と倍増し。その後、経済の高度成長と共に順調に推移して2000年には12,700万人に達した。しかし、2008年に極大値である12,800万人を記録し

てからは減少へと転じ、2050年にはとうとう1億人を切り、2100年には現在の約1/3に過ぎない4,700万人まで減少すると予測されている。今年生まれた赤ちゃんは2100年頃まで生きるであろうから、そこまでの数値は、ほぼその予測値どおりに推移すると思われる。因みに、もしこの傾向がその後も長く続くとしたら、日本の人口は、2200年には鎌倉時代と同じ750万人に。そして、2300年には大和朝廷の頃と同じ140万人になってしまい、佐渡島のトキのように、ついには日本人が絶滅してしまうという予測もあるくらいだ。

このように、もし日本人が地球上から消滅してしまったら、日本が抱える問題について考えること自体ナンセンスである。神道もゾロアスター教やミトラ教のように消滅してしまうであろう。ならば何故、われわれはこのような深刻な事態に陥ってしまったのかをよく考えてみる必要がある。1人の女性が一生の間に産む子供の平均数である合計特殊出生率(以後「出生率」と記す)が、日本の場合、1950年には3.65人もあったのに、2000年には1.36人にまで減少した。父親と母親の存在によって子供

は生まれるものだから、出生率が2.00人以下の国は必ず人口が減少することになる。その後、少しは上昇したというが、それでも1.4人程度であり、これでは、一代進む毎に日本の人口が約3割減少することになってしまう。何故、このように出生率が低いかというと、現在、女性の初産の平均年齢が30歳を超えてしまっているからである。確かに、日本人女性の平均寿命は86歳まで伸びたが、「子供が産める年齢」には自ずと限りがあって、平均寿命の伸びは意味がない。初産の平均年齢を20代前半に下げないかぎり、子供の数は減る一方になる。

お産に失敗して死んでしまった妻イザナミ恋しさに黄泉国まで行った夫イザナギは、すでに黄泉国の住人となってしまったイザナミの変わり果てた姿に驚き、いのちからがらこの世に逃げ帰る際に、この世とあの世(黄泉国)との境界にあるトンネル「黄泉比良坂」を封印して何と言ったかは皆さんご存じであろう。恥をかかされて怒ったイザナミは「1日に1,000人を殺す」と言ったのに対し、イザナギは、ならば「1日に1,500人を生まれさせる」と宣ったのである。以後、日本の人口は1日に500人ずつ殖えてこの国は栄えていったのである。1日に500人ずつ増えれば、1年で182,625人ずつ増える計算になる。だとすれば、わずか700年間で現在の人口にまで達してしまうことになるので、古事記の編者も少しサバを読んだのであろう。このことから判るように、神道の目指す世界は「常若」の世界であり、式年遷宮などもそういう日本人の願いを象徴するものであると言える。

神社巡り④
ジョン・グリーン

栗田神社

●京都府東山区栗田口鍛冶町1

今年10月の栗田祭に初めて参加した。栗田祭は、京都の栗田口鍛冶町にある栗田神社のお祭りだが、それは、体育の日前夜に知恩院前の夜渡り神事から始まる。知恩院前には、不思議な瓜生石があり、栗田神社の神さま(牛頭天王=スサノオノミコト)がそこに降臨したという伝説がある。この神事が面白いのは、瓜生石の前に祭壇を組み、神に対し、神職が祝詞を奏上しお供物を捧げるが、知恩院の僧侶もお経を唱える、そして神職も僧侶も一列になって瓜生石の周りを三度巡拝する、という神仏習合的有様であった。その有様は体育の日の神幸祭にも15日の例大祭にもみえた。

前者は、剣鉾を先導とする神輿行列が栗田神



栗田神社境内の中心をなす本殿

社から青蓮院まで練り歩き、四脚門から青蓮院しょうれんいんに入御した。宮司はそこで薬師如来に献幣し、門主様も御加持を受けた。明治までは、その薬師如来が栗田神社の祭神牛頭天王の本地仏だったのである。後者の例大祭は、神職の他知恩院の僧侶、さらに例えば阿含宗も参列したのである。佐々貫敏道宮司は、栗田祭の見所は「伝統的なものと革新的なものを併せ持つ」ことにある、と言う。伝統は神仏習合だとすれば革新も多くある。

最も注意をひくのは、夜渡り神事に登場する風流灯籠の山車だろう。イルミネートされる、赤、青、紫の龍などの大燈呂は、子供、若者を魅了するのに十分なものがある。江戸期の神事にも数々の大燈呂山車が出ていたが、それが長いこと断絶していた。その復活は、実は今から六年前の2008年である。京都造形芸術大学の学生がデザインに当たっていた。1960年頃からしばらく途絶えていた神輿渡御も、2000年に復活したが、その時から女性も神輿担ぎの役をしている。神輿を担ぐ女性の姿にも栗田神社ならではの革新が見取れる。

栗田神社は、青蓮院と密接な関係(塔頭・本山/垂迹・本地)が歴史的にあったが、感神院(今の八坂神社)とも親密であった。神が瓜生石に降臨した際金札が見つかり、そこに「感神院新宮」とあった、と伝説にある。神社はそれ故「感神院新宮」として知られていたが、明治の神仏分離の時「栗田神社」に改名したのであ



「感神院新宮」の額が見える栗田神社の鳥居

る。感神院新宮は、もちろん感神院と同じ牛頭天王を御祭神とするほか、神幸祭に登場する特徴的な剣鉾は、祇園祭の山鉾の原形だという説さえある。祇園祭は事情があって行われなかった年に感神院新宮の神幸祭がその代替をなしていた、と佐々貫宮司は説明する。今でも、栗田・八坂両神社がお互いの例祭又は神幸祭に参列し、幣帛を捧げる。

栗田神社の境内は、スサノオノミコトが祀られる立派な本殿がある他、日本最古といわれる寄木造りの恵美須神像を祀る出世恵美須神社がある。年中行事は、10月の栗田祭は有名だが、1月の出世恵美須祭も7月の納涼ビアガーデンも好評で、参拝者で賑わう。栗田神社は、正に伝統と革新が重んじられる場である。

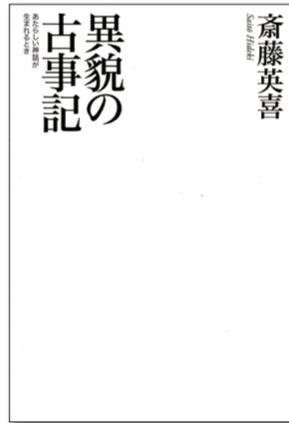
書評

異貌の古事記：あたらしい神話が生まれるとき

斎藤英喜[著]

青士社、2014年4月刊、271ページ、ISBN978-4-7917-6749-6、2,592円

評／ミヒャエル・ヴァフトウカ(テュービンゲン大学同志社日本研究センター所長)



『古事記』は712年の編纂直後から他の書物に埋もれ、歴史から忘れ去られていたが、18世紀の本居宣長の『古事記伝』により日本古典の中心的ポジションへと押し上げられた。

著者は近代初期から20世紀にかけての『古事記』の受け取られ方を追っている。第一章では宣長の画期的な(再)読み込みを述べている。第二章では平田篤胤による神話の拡大解釈について紹介している。第三章では、黄泉の国の王としての大国主命について新たな解釈を述べている。明治初期、出雲大社の宮司千家尊福らが大国主命の地位を天照大神のそれに匹敵するものに高めようと試みたが、第四章ではこの試みについて議論している。第五章、第六章ではラフカディオ・ハーン¹⁾の精神論や折口信夫による大嘗祭の解釈などについて紹介している。

この著書の明確な目的は、日本の統一国家の成立や人民統一のイデオロギーと関連づけられる「ステレオタイプ」的な受け取られ方とは別の『古事記』の性質や側面を紹介することにある。(12頁) 著者の斎藤氏は「建国神話」と関連付けられる『古事記』の近代解釈を固定した「イデオロギー的視点」以外の可能性を示しているのである。(22頁)

全体を通して著者は宣長と篤胤が『古事記』を精読し注釈しただけではなく、彼らの注釈書の中でオリジナルの文献を改めて解釈し、当時の世界観に適合する新しい神話を創造したということを示している。その分野の者なら知っていることだろうが、宣長も篤胤も多くの神話の再解釈にキリスト教や西洋の最新の天文学的知識を利用したという事実は驚きであろう。

例えば、宣長は高天原に神々が自然に登場するという『古事記』の冒頭部分を、天地が創造される以前に産巢日神が既に存在したという話に書き換えている。このようにして彼は西洋的な唯一の「創造神」の神話とよく似た神話を作り上げたのである。篤胤も同様に西洋の天文学的・地理学的知識

を、彼の天地創造神話の中に生かしている。あげくに月と重ね合わせた黄泉の国を天と関連付け、地球上で日本を位置付けているのである。西洋のキリスト教的文献と違って、日本の古代においては大洪水は語られていないので、篤胤は日本が他の国々よりも高い場所にある、文字通り世界の最高位であり太陽に最も近い国であると結論付けているのである。著者自身も指摘しているように、このことが、皇国が世界の中心で、全ての起源であるという論理を生むことになったのである。(92頁) 宣長と篤胤は中華中心の神秘主義的中世思想を克服しようと努めている。その為、西洋的考えと渡り合う新しい世界観が歓迎されたのである。

残念ながら、著者はよく知られたラフカディオ・ハーン²⁾の日本に対する賞賛とロマンティックな見方を神道への「深い理解」の表現として追っている。(183頁) 然るにチェンバレンの1882年の『英語訳古事記』の中で100ページにも及ぶ序章でほんの一段落を引用するに止めつつ、彼の科学的・客観的解釈を表面的とし、「本当の神道」の理解に欠けているとみている。(182頁) もし斎藤氏がチェンバレンの1912年の批判的・分析的で重要な論文“The Invention of a new Religion”³⁾を読者に紹介したなら、日本の作品に共通する誤った表現を打ち破ることができたに違いない。

他方斎藤氏は主役達を唯の古代神話のコメンテーターではなく、近代の神話の創造者として紹介している。それぞれの主役が時代毎の歴史的・政治的・知的事情にあわせて新たな解釈を提示したことを見事に示すのである。これらの違った解釈を精査し、比較することで斎藤氏は『古事記』の近代の受け止め方や解釈についてわかりやすく参考になる解説を示してくれたのである。

書評

武士道 侍社会の文化と倫理

笠谷和比古[著]

エヌティティ出版、2014年2月刊、174ページ、ISBN978-4-7571-4322-7、3,024円

評／ジョン・グリーン(国際日本文化研究センター教授)



本書には武士道に関連する数多くの歴史史料が原文、そして現代語訳で掲載され、明解な解説も添えてある。江戸時代の武士道論がダイナミックに変遷していく姿の説明は、斬新で、興味深い。本書は読みやすい学術書だけでなく、一種の啓蒙書でもある。武士道は今日の我々の行動様式を伏在的にも左右している、と著者は主張する。例えば「はじめに」では東日本大震災から語りだし、その際、略奪も、暴動も発生しなかった事実に日本文化の特性「すなわち武士道」の影響が働いていたと著者がいう。

この本の、このようなハイブリッド的な性格づけは魅力でもあるが、違和感を禁じ得ない原因でもある。武士道の文化的遺産が21世紀の日本人の行動様式にまでつながるのかどうか。なお、武士道には「負」の遺産がなかったのかをもっと知りたいと思った。第二次世界大戦で陸軍が捕虜などに働いた虐待については、イギリスのRussell卿は「the natural outcome of the code of bushido」(武士道倫理の必然的な結果)と書いたが、この立場は全くでたらめなものなのか、それとも根拠があるのか。

評者は江戸後期の武士、武陽隠士が書いた『世事見聞録』の中の「武士のこと」を英訳した事がある。武士は救い様のないくらい墮落しているという。その挙げ句「10人の内7、8人」は武士道を失っている、とまでいう。武

陽隠士の台詞を多少割り引く必要があるが、江戸期の武士道の理論と実践との間のギャップをどう語るべきか。

著者は武士道と神道とについても触れている。例えば江戸初期の『武士道用鑑抄』の著者石田一鼎は、武士道と神道に関連づけ、神道の神秘性は武士道の精神と相通じるものがある、という。江戸中期に刊行された『武学啓蒙』の武士道論については、著者は「優れて神道の清明論によって基礎付けられている」と指摘する。江戸後期は山岡鉄舟も神道を担ぎますが、彼の場合は、神道のみならず儒道にも、仏道にも言及して、その三つの道が融合したものが武士道を形成している、と言う。これなどの事例は皆面白いが、結論的には、武士道が神道と有機的に結びつくのは、江戸時代ではなくて、Chamberlainが主張するように、明治も後期と考えた方が無難だろうか。

評者は『武士道：侍社会の文化と倫理』をよんで刺激を受けた。貴重な資料、面白いエピソード、挑発的な意見に満ち溢れた、実に読み応えのある本である。武士道的女性論、徳川吉宗と武士道、そして「武士屋敷駆込慣行」⁴⁾等々は、大変興味深い。この本を皆さんにぜひお勧めしたいと思う。

Essay Competition 結果発表

2014年5月から7月にかけて毎年恒例の英語論文コンテストを開催した。2014年のテーマは以下のとおりである。

- ① The Main Features of Edo-period Confucian Interpretations of Shinto
- ② The Visual Culture of Shinto: Material Forms and Representations of the Kami in History
- ③ The Significance of Death in Shinto Regulations

多数の応募論文の中から厳正なる審査により、入賞論文が下記のとおり決定し、11月22日開催の国際神道セミナーの中で結果が発表され、入賞者には規定の賞金が贈られた。

〈1位〉
論文タイトル: 『The Significance of Death in Shinto: Ways of Becoming a Kami Described in the Shintoshu』
執筆者: Sebastian Balmes

〈2位〉
論文タイトル: 『The Significance of Death in Shinto』
執筆者: Saaya Sugimoto

〈3位〉
論文タイトル: 『From Confucian Shinto to Shrine Shinto: Esotericism as a Catalyst』
執筆者: Avery Morrow

1位、2位の受賞者より喜びの声が寄せられたのでここに紹介する。

セバスティアン・バルメス (1位) Sebastian Balmes

Ph.D. candidate and tutor, Japan Center, LMU Munich



大学での諸事情により国際神道セミナーに参加できず大変申し訳ありません。しかし今回受賞できたことを非常に有り難く思っております。また、コンテストのために書いた私の論文は仏教的要素に偏っているかと最初に疑問がありました。受け

入れてくださったことは今後の研究の自信に繋がりました。現代の読者が題名から受ける印象とは違い、『神道集』は神道と仏教を別々の伝統として捉えていません。仏教的に思われる叙述でも、神道の研究の重要な対象にもなりえます。神道国際学会が様々な宗教を受け入れることを幸いに思い、今回のセミナー『キリスト教と神道との対話』において宗教の普遍的な特性をみつけることができるだろうと感じております。

杉本彩絢 (2位)

SOAS, University of London,
MA Religions of Asia and Africa



この度は、Essay competitionにおいて2位という栄えある賞を頂き、誠にありがとうございました。私は未だ修士学生という立場にあり、きちんとした専門分野も確立していないため、この度の受賞

には大変恐縮しております。

私は現在、古代日本文化に興味を抱き少しずつ研究を深めているところであります。日本文化を外から眺めてみたいという思いからイギリスに渡り、研究を進めて参りました。日本の外でこそ客観的な研究が可能であり、多くの敬意ある日本研究が海外においてなされているのだと気付くと同時に、海外であまり進んでいない研究テーマの存在にも気づかされました。今回受賞を頂いた論文も、古代日本の風葬について書いたのですが、海外での研究が進んでいない分野のよう見受けられたため、英語で論じることによって少しでも今後の研究へ貢献できたという思いで書きました。その論文に、今回このように光を当てて頂いたこと、審査員の方々はじめ、神道国際学会の皆様へ深く感謝申し上げます。

まだまだ研究者として未熟な私ですが、これから人生をかけて日本文化研究を進めていきたいと考えております。今回の受賞は、私にとって大きな励ましと勇気を与えてくれました。本当にありがとうございました。

國弘正雄先生を 偲んで

神道国際学会理事長
三宅善信

十一月二十五日、長年本学会の理事を務められた國弘正雄先生が逝去された(享年84)。國弘先生は本学会の設立メンバーの一人で、平成22年まで理事として貢献して下さった。アポロ11号月面着陸中継の同時通訳者として名を馳せ、「英語の神様」とまで称えられた國弘先生は、日本語を公用語として世界の研究者たちと神道について学び合う本学会をこよなく愛して下さった。御霊となられても、本学会の行く末を照覧くださいませ。

理事の業績・研究報告

マイケル・パイ理事

『Can Shintō think Green? Introductory Remarks on Shintō, the Environment and Industry』, Academia.edu October 2014.

栗本慎一郎会長

横浜国立大学主催横浜都市文化フォーラム講演、ゼミ2014年10月〜15年1月、連続5回。

評論、ラジオ日本毎週日曜日午後9時〜10時、「栗本慎一郎の社会と健康を語る」2014年1月〜6月。

三宅善信理事長

8月24日〜27日に英国バーミンガム大学で開催された第34回IAARF世界大会で運営責任者を務めた。

9月15日、石清水八幡宮で仕えられた勅祭石清祭に列席。

9月26日、清水寺で開催されたWCRP理事会に理事として出席。

9月27日、関西学院大学で開催されたWCRP円卓会議に出席。

10月4日、両国国技館で開催された大関琴の断髪式に入鏡。

10月10日、在大阪アメリカ総領事館で開催された日米安全保障シンポジウムに参加。

10月29日、大阪大学で開催された

震予知フォーラムに出席。

10月29日、榎原神宮で仕えられた板遷宮祭に列席。

11月6日、天理教本部で開催された大阪府宗教連盟総会に常任理事として出席。

11月10日、黒住教本部で仕えられた立教二百年奉告祭に列席。

11月18日、第49回大阪府佛教徒大会で乾杯の発声を行う。

12月5日、参議院議員会館で開催された世界連邦運動協会の執行理事会に出席。

12月20日、神宮会館で開催された世界日本宗教委員会の年次大会に理事として出席。

12月26日〜27日、京都で開催された

第61回コロモス研究会議に理事として出席。

マーク・テューウェン理事

Teeuwen, Mark and Blezer, Henk *Buddhism and Nativism: Framing Identity Discourse in Buddhist Environments*. Brill Academic Publishers 2013

"Buddhism and Nativism: Framing Identity Discourse in Buddhist Environments", pp. 1-28 (Teeuwen and Blezer)

"The Buddhist roots of Japanese nativism", pp. 51-76 (Teeuwen) Breen, John and Teeuwen, Mark *Lo Shinto: una nuova storia*. Rome:

Astrolabio 2014

Teeuwen, Mark and Nakai, Kate Wildman, eds

Lust, Commerce, and Corruption: An Account of What I Have Seen and Heard by an Edo Samurai.

Columbia University Press 2014

"Japanese Religion: a Terminal Patient?": Overseas Symposium Proceedings (Nichibunken 2014), pp. 243-246

Oxford Bibliographies: "Buddhism and Shinto", Oxford University Press 2014

編集後記

読者の皆さん、「神道フォーラム」記念50号はいかがですか。今回は、「神道フォーラム」の創刊号以来の歩みを辿ってみることにしましたが、やはり出来た当時と今とはかなり趣の異なる『フォーラム』になっていますね。皆さんのコメントは首を長くしてお待ちしています。連載記事「神道DNA」、「神社めぐり」や「書評」欄は継続的に掲載しましたが、掛野先生的好評連載記事や「話題のこの人」は次号に回すことにしました。お許し下さい。最後に、神道国際学会の創立メンバーの國弘正雄先生がなくなりました。先生のご冥福をお祈りします。

神道国際学会からのお知らせ

- ◎いつも社報や刊行物をお送りくださり、ありがとうございます。
 - ◎ご入会のご案内: 神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料をご請求ください。
- | | |
|-----------------|-----------|
| 一般会員 (年会費) | 3,000円 |
| 賛助会員 (年会費) | 10,000円 |
| (法人会員 (年会費) | 100,000円) |
| 特別賛助会員 (個人・一時金) | 30,000円 |
| 特別賛助会員 (団体・一時金) | 500,000円 |

NPO法人 神道国際学会 〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F
Tel. 03-6805-7729 Fax. 03-6805-7769 info@shintoo.org